

モンゴル国 オルホン川航行

48代 OB 市岡慎也

隊員構成： CL市岡慎也（48代）、片岡賢佑（49代）

期間： 2005年8月2日（火）～9月14日（水）

場所： モンゴル国 オルホン川（ホジルト～スフバートル）
約800km

航行手段： ゴムボート1艇と組み立て式ボート1艇

行動スケジュール

8月2日	関西空港出発 北京空港到着 北京泊
8月3日	北京空港出発 ウランバートル到着 ウランバートル泊
8月4日～6日	ウランバートルにて装備購入、大使館訪問、現地連絡 本部訪問、補給地連絡 ウランバートル泊
8月7日	スタート地点ホジルトへ ホジルト泊
8月8日～13日	航行(ホジルト～オルジート) ハラホリン通過
8月14日	オルジートにて補給物資受け取り
8月15日～19日	航行(オルジート～オルホン1) 崖(最狭部)通過
8月20日	オルホン1にて補給物資受け取り
8月21日～28日	航行(オルホン1～オルホン2) オルホンツール通過
8月29日	オルホン2にて補給物資受け取り
8月30日～9月4日	航行(オルホン2～スフバートル) オルホン3通過
9月5日	ゴール地点スフバートル到着 スフバートル泊

2005年8月2日
から9月14日
まで我々は、モン
ゴル国中央部を北
上して、ロシアの
バイカル湖へと流
れるオルホン川を
航行した。航行区
間はモンゴル国中



央部のホジルト(ウランバートルから西
に 400km)からスフバートル(ロシアと
の国境手前の町)までの約 800km であ
る。

この計画の大きな目的は2つ。まずは、
オルホン川のホジルトからスフバートル
までの 800km を完航すること。私たち
の下ったオルホン川はダムや護岸整備
など人工物はなく、自然の流れを保っ
たままであり、800km の行程中に川か
ら眺めたモンゴルは実に多くの表情を
見せてくれた。水路のような細い流れ
から始まり、まさにモンゴルといえる
ような大草原地帯を蛇行して進む。や
がて崖や山に囲まれ、瀬がいくつもある
丘陵部に入り、川岸の植物の丈が長く
風景が眺められない憂鬱な地帯へと
流れ出た。メディアで取り上げられが
ちな草原の風景以外の、様々なモン
ゴルの姿に触れることができた。

もう1つの目的として、一般に、川文
化を特筆されていないモンゴル人の
川文化を実際に見つめることがあつた。

我々の出会ったモンゴル人は適度
に川の水を利用しながらも、川その
ものに依存した生活は送っていない。
それは冬

丘から川を望む

には凍ってしまい、夏であっても水量
が一定ではないというモンゴルの川
の状況から、依存するには不安定
すぎるという点があるのだろう。

しかしながら、オルホン川流域
では釣りを楽しむ人や泳いで遊ぶ
子どもたち、そして家族がピクニ
ックのように川原で団欒する様
子も見られた。日本の川のように
生活の場としては成り立ち得ない
モンゴルの川ではあるが、それ
以外の部分では日本となんら変
わらない川への愛着が感じられ
た。

この航行中に出会ったモンゴル
人は実に我々に優しく接してく
れた。モンゴルでは珍しい川下
りをしている言葉も通じない「
ガイジン」の我々に茶や菓子、
酒を振舞ってくれた。食事もご
馳走になったし、家にも泊めて
もらった。果たして逆の立場で
私たちが同じことが出来るだ
ろうか。やはりモンゴル人の遊
牧民であるという文化的背景を
まざまざと感じた。しかし、そ
んなややこしいことよりも、優
しくもてなしてくれたこと、
ボートに乗った時の笑顔、我々
に興味を持ってくれたことが単
純にうれしかった。

た。人と人との触れ合いに本当に感動させられる海外遠征であった。

私にとって初めての海外。それがモンゴルであった。しかも川を下るという普通の海外の過ごし方とは全く違う目的。これまでイメージしていた学生の海外旅行といえば、観光地を巡り、おいしい郷土料理を食べ、時にはまずいものを食べては仲間とハシヤギ、お土産を買い漁るといったものであった。ただ、後輩の「誰も下っていない川を下りたい。」という発言で、地図を眺めていた結果、モンゴルの中央部からバイカル湖に流れる川を発見し、興味をもってしまったことから、このイメージからは大きく外れる海外での生活を経験することとなった。

私の体験した初海外モンゴルは、まずはモンゴルという国の曖昧さとの闘いであった。モンゴルで川を下るためにはどうしたらいいのか。許可は要するのか、日本から何が持ち込めるのか、現地に何があるのか。調べれば調べるほどモンゴルの制度は曖昧で、去年まで通用していたものが、今年からは適用されなくなっていたりと、ガイドブックの情報はもはや古くなり、インターネットの情報は信憑性の低いものばかりであった。それならばまずはモンゴルとのツテを作ろうと、中東アジアを研究している教授のもとへと向かった。

次にモンゴルの研究をしている研究者の方を紹介してもらい、さらに紹介でモンゴルと交換留学をしている大阪国際大学の教授のもとへ行き、モンゴルに留学中の学生に辿り着き、そこで直接モ

ンゴルの方と連絡が出来た。そして日本では知ることの出来ない曖昧な点をクリアするために偵察合宿を計画した。この時点で色んな方にお世話になった。自分の中でまだモンゴルで川を下っているという姿が出来ていないまま、いろんな方にお世話になり、引き返せない気持ちだけは募っていたが現実味はまだ湧かないでいた。



冬のモンゴルで偵察。氷つく川

偵察合宿では、マイナス 40℃のモンゴルで鼻毛が凍り、体調を崩し、ケンカをして、旧正月祝いで飲まされ食わされ体重が 3kg 増えて、新たな問題が次々出てきた。不安との闘いであった。ただ本合宿に向けて着実に準備が進んでいるという実感は、問題をクリアするたびに感じる事が出来た。さらに 20 歳の誕生日を冬のモンゴルで迎え、現地の日本人学生に簡単な食事会もしてもらい、今までにない誕生日の思い出となった。その思い出の中には、祝われているはずの私が一番食事代を払ったという不思議な事実が忘れず残っている。

そして本合宿。冬とは違う、さわやかなモンゴルで、本合宿に辿り着けた達成感、川を下り始めたときの爽快感、初めて遊牧民と会ったときの不安と興奮で毎日が感動だった。最初は不安と恐怖の遊牧民との接触であったが、彼らのフレンドリーで解放的な気質がわかってくると、積極的に遊牧民の移動式住居ゲル



平原から山間部へ

を訪ねるようになってきた。私たちを丁寧にもてなしてくれる、彼らの行為に甘えまくり、馬乳酒や菓子、食事を振舞ってもらった。そのお返しとしてボートで遊牧民と遊んだ。彼らにとって、やはり川でボートというものは珍しいらしく、最初は不安定さに怖がっているものの、すぐに慣れてボートを楽しんでいた。特に子ども達とはよく遊んだ。モンゴルといえば相撲。中学生ぐらいの子どもと本気で闘うも負けてしまった。探検部でトレーニングに励み、パドリングで鍛えた背筋と腕力は、遊牧民の前では子どもにも敵わない。これは衝撃であった。主食は肉という遊牧民の力強さを一番感じた瞬間であり、朝青龍の強さを妙に

納得してしまった。

主食が肉ということであるが、私たちも、一度目の前で解体されたヤギをご馳走になった。これも衝撃の映像であった。ハンマーで頭を叩かれ、気絶したヤギの腹に小さくナイフで切り込みをいれ、直接手を入れて心臓を止める。これが一番血の出ない殺し方で、自然崇拝をしているため、大地を血で汚さないための方法だそうだ。そのまま仰向けで解体し、あばら骨に溜まった血は洗浄された腸に詰められ塩茹でされる。すると血のソーセージが出来上がる。それ以外の内臓も全て塩茹でされ、タライに山盛りにされた。そして「好きなだけ食べ」と恐らく言っていたと思うが、すごい笑顔でナイフと共にタライを手渡された。味は口の中に動物園

が広がるようで、正直おいしいと言えるものではなかったが、遊牧民にとって貴重な財産である家畜を私たちのために捌いてくれた好意には、ほんとうに感動させられた。

このモンゴルでの活動はまさに遊牧



8 / 17、瀬に突入

民との生の触れ合いであった。しかも、川を下りながら、つまり川からアプローチするという手段での触れ合いは、草原で暮らす遊牧民とは結び付けられずに文献では載っていない水辺の暮らしを見ることも出来た。

情報化社会の中で、モンゴルの情報、遊牧民の暮らしや文化を知ろうと思えば、すぐに知ることが出来る。ただ、どうゆうわけか一度定着したモンゴルのイメージから逸脱するような情報、あるいは期待されていない情報は消されるか、あるいは歪曲されているように感じる。ウランバートルで聞いた「遊牧民は川を怖がり、泳げない。」というモンゴル人の話もそうである。私が見た遊牧民は楽しそうに川で泳いでいた。実際には正確でない情報をイメージから作り出し、「泳げないもの」にしている。さらに「最近の遊牧民は、治安の悪さからか、家に鍵をかけるようになった。旅人や客人をもてなす文化を持つ彼らの雄大さは失われてきている。残念だ。」という話も聞いた。これは、「治安が悪くなってきたこと」を問題視せずに「遊牧民の雄大さが失わ



モンゴルで取材を受ける

れてきた」ことを問題視しているような発言であった。つまりモンゴルの人自身でも「遊牧民はどんな環境であれ、雄大な心を持ち、おおらかで朗らかである」というイメージが定着しており、それを逸脱しているのは許せないようだ。

だから私はモンゴルでの話をする際には「遊牧民はこうである」という言い方は、なるべくせずに「私たちの出会った遊牧民家族はこんなだった」と話すようにしている。

また、直接触れ合うことで得られる感情は、どんな大量の文献・資料から得た情報よりも大切であると思う。飲むと必ず次の日に下痢になる馬乳酒。モンゴルでは積極的に飲みたいとは思わなかったが、今はもう一度あの酒を飲みたいと思ってしまっている。感情とは不思議なものである。

(48代OB)



川で遊ぶ子供たちと